
次元の平和を守ります!!

如月 紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の平和を守ります!!

【Nコード】

N6839X

【作者名】

如月 紅葉

【あらすじ】

全次元の平和を守ることを目的とした全次元最大の機関、その名も『全次元平和管理局』。そんな局に、1人の男が所属していた。その男の名は『御神貴京』。人間でありながら神々の王に次ぐほどの力を持った彼が、その力を振るって次元の平和を守っていく!!という感じの最強ハーレムラブコメディ!! ※最強、厨二病要素を多分に含みます。それらに嫌悪のある方は注意してください。なお、残酷描写は念のため付けてあります。

プロローグ『その男、規格外』

――『全次元平和管理局』

それは、とある次元のどこかに本局が存在する、全次元最大の機関。全ての神の王『神王』を筆頭に、様々な次元、世界の動向を監視し、不穏な動きや無駄な干渉を察知、必要とあらば排除することで各次元世界の平和を保つことを目的とした、つまりは、名前通り全次元の平和を目的とした機関である。

「貴京様、ありましたか？」

「いや、全然」

全次元平和管理局本局、Dブロック『無限書庫』

ありとあらゆる世界の情報と知識が集まるその場所でも、最奥。

ありとあらゆる世界の禁忌が記された本ばかりが集まる、『禁書区』

画』。

並の人間なら立ち入るだけで精神を蝕まれ、全次元平和管理局でも一定以上の地位を持つ者でなければ入ることすら許されない場所。

そんな場所に、2人の人影があった。

最初に声を発した人影は、全次元平和管理局に所属する女性『アリシア・フォン・クラッツベルン』。

後に声を発した人影は、アリシアの上司であり、同じく全次元平和管理局に所属する男『御神貴京』である。

「うーん、確かこの辺りにあったと思うんだがなあ」

「でも、神殺しの方法が書かれた禁書なんて、何に使うんですか？」

「いや、俺が使う訳じゃない。そもそも俺はそんな物見なくても神殺しなんて余裕だ」

「分かってますけど…威張って言う様な事じゃ…」

あまりに堂々とした貴京の発言にアリシアが若干呆れるが、それを感じにした様子もなく貴京は話を進める。

「俺の知り合いが邪神殺しの任務を受けてな、初めての神殺しだって言うから、

何かしらアドバイスをしようと思ったんだが…」

「思ったんだが…なんですか？」

「面倒だったからな、代わりに神殺しの方法が書かれた禁書でも持つて行ってやろうかと」

「ただの面倒臭がりじゃないですか…」

またも呆れるアリシアに、貴京が驚いたような顔をして一言

「知らなかったのか？」

「知ってましたけど…」

「ですよー」

力を持たない者は近づくことさえ出来ない禁書区画には、あまりに不釣り合いなほのぼのした光景である。

「ところで、その邪神殺しの任務を受けたお知り合いってどなたなんです？」

神殺しなんて結構なランクが無いと指令が来ない任務ですよね？」

「んー？ライゼル・ハーネスだよ」

貴京の口から出たその名に、喋りながらも貴京の数倍の効率で本を探していたアリシアの動きが止まる。

「？——どうした？」

「えっと…ライゼル・ハーネスさんって、あのライゼル・ハーネスさんですか？」

「んー、どのライゼル・ハーネスか知らんが、俺が言ってるのはあれだな、

特務部部长、元老院第8位のライゼル・ハーネスだな」

「あのライゼル・ハーネスさんじゃないですかあ！！」

「うおう！？びっくりさせるなよ！！脚立から落ちるだろ！？」

アリシアの突然の大声に、脚立を斜めにしつつもバランスを保つという芸当を見せる貴京。

「あ、すいません…でも、やっぱりあのライゼル・ハーネスさんじゃないですか！！」

「あ、そうなんだ、あのライゼル・ハーネスさんなんだ」

「そうなんだじゃないですよ…ハーネスさんって言ったら、オーバーランクの局員じゃないですか…」

「まあ、そうだな」

「そんな人に、神殺しの禁書なんて必要なんですか？いざとなったら力押しで
さえなんとかなるんじゃない？」

「まあ、なるだろうなあ」

苦笑しながらそう言う貴京、未だに脚立は斜めのまま、さらにその状態で本探しを再開している。

「けどまあ、正しい対処法を知っておくに越したことは無いだろう？」

「まあ、それはそうですね」

「それにライゼルは俺の親友だからな、万に一つも、いや、億に一つも兆に一つも
あいつが後れを取ることは無いと思うが、もしもがあったら困る、だから——ん」

「？」

「あったあった、これだ、ほら」

そう言って貴京が脚立から降りてアリシアに見せた本は——

「『猿でも分かる神殺しの方法』…猿って…ええー…」

そんなタイトルに、非常にコミカルな表紙の本。

間違っても禁書には見えない、むしろ普通の本屋にあっても違和感を覚える。

「猿が神殺しをする訳無いのにな…もしかしてこの本の著者は馬鹿なのか？」

「流石にそれはないでしょう…」

「だよな、馬鹿に神殺しの方法の禁書なんて書けるはずが無いし、きつとウケ狙いなんだろうな…完全にスベってるけど」

「ですね…」

「まあ、内容が良いのは昔読んで分かってるから、後はこの本をライゼルに——」

『全次元平和管理局本局、全館呼び出しをいたします。御神貴京執務官、御神貴京執務官、局長が呼びです。本局内にいらっしゃいましたら、Aブロック「局長室」までお越しください。以上で呼び出しを終わります』

「oh、呼び出し…」

「局長直々の全館呼び出しですか…」

「これは行かない訳にはいかないな、ということでアリシア、この本はお前がライゼルに届けてくれ」

「あ、はい、分かりました」

「じゃ、頼んだぞ」

その言葉と共に、貴京の姿が掻き消える。

「…禁書の力を封じるために神話級の術式阻害結界が張ってあるのに、

いとも容易く転位…相変わらず、私のご主人様は規格外だなあ…」

貴京が転位の術式で移動した後、誰ともなくアリシアがそう呟いた。

プロローグ『その男、規格外』（後書き）

拙い文章だと思いますが、これから頑張って行きますので、宜しく
お願いします！！

第1話『任務受諾』

——コンコン

『はい』

「御神貴京です」

『入りなさい』

「失礼します」

禁書区画から転位の術式で即座に局長室の前に移動した貴京は、特に気追うことも無く局長室に入室する。

「速かったわね」

扉を入って正面にあるデスクで、両肘をついて腕を立て、組んだ手の甲の上に顎を乗せて微笑む銀髪の美女。

彼女こそが貴京を呼び出した『全次元平和管理局局長』にして、全ての神々の王である『神王』、『シルヴィア・ローゼンベルグ』である。

「転位の術式を使って来ましたからね」

「あら？今日は禁書区画にいたんじゃないかったの？」

「何故俺のいた場所を知っているのか非常に気になりますが…
そうですよ、禁書区画でちよつと探し物をしていました」

「あそこには、あらゆる禁書能力を封じるための神話級の結界が張ってあったはずだけど…」

「あの程度の結界で俺の術式を封じられるはずないでしょう」

さも当然というような貴京のその言葉に、シルヴィアは一瞬驚いたような顔を

見せたが、その表情はすぐに苦笑に変わる。

「あの程度って…あれは術法研究室の室長が直々に張った神術結界よ？局内でも

それを指してあの程度って言えるのは貴方を含めて数人位よ…」

「実際あの程度だったのだからしょうがないだろう…」

いつの間にか口調が素に戻っている貴京だが、シルヴィアはそれを気にした様子もなく席を立つと、人差し指をピツと立てて貴京に詰め寄る。

「良い？貴方は表向きは特に強大な力を持っている訳でも無い、一般の局員って

ことになってるんだから、その辺の行動はちゃんと考えてしてよね？」

「分かってる、分かってるよ、てか顔が近いッ!!」

神王であるシルヴィアは、戦闘能力が全次元最強であるのは勿論、その容姿もまさに規格外である。

完璧な容姿を持つ人物を指して『神に愛された』などという事があるが、

シルヴィアはその神の王なのだ、最早その容姿に非の打ち所は無く、貴京の様に少々たじろぐだけという方が異端なのだ。

常人ならば男女問わず骨抜きにされてもなんら不思議ではない。

むしろ先程言ったようにされないとおかしい。貴京おかしい。

「あら、御免なさい」

シルヴィアは当然の如く自らの容姿の良さを自覚している訳で、先程の行動も

言うまでもなくわざとである。

それを証明するかのように離れてから悪戯っぽく笑うシルヴィアを見て、

貴京は疲れた様な表情を浮かべながらも、話を先へと進める。

「それで？ わざわざ俺を呼び出したってことは何か重要な案件があるんだろ？」

表向きは『神王にちよつと気に入られてる一般的な執務官』で通っている貴京だが、

実際は最高位ランクである『SSSランク』の保有者にして、全次

元平和管理局で

神王以外の命令系統からの強制力を受けない唯一の部隊『神王直属部隊【神衛】』

の2人しかいない隊員の1人にして、部隊長なのである。

そんなポストにいる理由は色々あるのだが、一番は貴京が管理職を面倒臭がったからである。

「ええ、特別に頼みたい任務があつてね」

「特別任務？『神衛』を動かすほどの任務があるのか？」

「そうなの、とりあえず任務について説明するわね」

「ああ」

貴京が頷くと、局長室の照明が緩やかに暗くなり、今まで窓だった場所に神術でウィンドウが投影される。

そこに映し出されているのは一つの惑星。

青と緑で構成されたその美しい惑星の名は――

「『アルカディア』。今回の任務地となる惑星よ」

「アルカディア：地球と似て綺麗な惑星だな」

「ええ、基本的な構造は貴方の生まれ故郷である地球と同じよ。ただ、魔術や魔法

といった技術が存在していて、人間の他にも獣人やエルフ、魔族といった種族が存在するわ」

「ふむ」

「そして今回の任務で重要になって来るのが、魔族、その中の『魔王』よ」

シルヴィアのその言葉と共にウィンドウの画像が切り替わり、いかにも魔界と
いった感じの混沌とした大地が映し出される。

「『魔王』：基本的に魔族の王として魔族最強の力を誇る存在。アルカディアの
魔王もその解釈で合っているか？」

「ええ、通常はね…」

「通常は？」

何か含みのある言い方に、任務の核心に迫った気がして貴京の目が鋭くなる。

そして、貴京のその読みは見事に的中していた。

「今回はその通常と異なるのよ、そしてそれが次元世界の平和に脅威をもたらすとして、

今回正式に全次元平和管理局での任務として承認された」

そう言ってシルヴィアが取り出したのは一枚の書類。

貴京はそれを受け取り読み上げる。

「『アルカディアに出現した通常とは一線を画す能力を保有した魔王の討伐…』」

「そう、今回の目標であるアルカディアの魔王は、保有する力が強大すぎるの。

一魔王が持つにしてはあまりに強大、次元世界に脅威をもたらす可能性は勿論、下手をすれば次元間戦争を起こす可能性さえ否定できないわ」

「なっ…」

シルヴィアのその言葉に、貴京が思わず目を見開く。

何故なら貴京は世界の構造を知っているから。

「貴方が驚くのも無理は無いわね。貴方も知っての通り、通常、世界には

あらかじめその世界を創造した神によって根本的な情報が刷り込まれる。

いわばプログラムの様なものね。本当に大まかなものでしか無いけれど、

その世界に生まれる存在が、生まれながらにして個人で保有できる力の上限など、

根本的な部分はそれによって世界創造の際に決められている、魔王の能力値上限もね」

それは『星の意思』や『神の意思』などと呼ばれたり、『アカシツ

クレコード』の

根本になったりもする情報、後から得たなら話は別だが、生まれながらにして

その根本的な情報を無視した力を保有するなど、通常はあり得ないことなのだ。

「だけど今回は、その根本的情報を無視した魔王が生じた、ということか」

「その通り、根本的情報をプログラムと呼ぶなら、バグと言ったところかしら？」

それによって、通常は生まれるはずのない、強大すぎる力を持った魔王が生まれた」

シルヴィアがそう締めくくると、展開されていたウィンドウは消え去り、

部屋の照明も元の明るさに戻る。

「今回の任務はその魔王の討伐、次元世界に脅威を与える前に、速やかに討伐する

必要性があるわ。さらに存在自体がバグである今回の魔王、他にどんなイレギュラ

ーが起こるか分からない。その辺りを考慮した結果、貴方達『神衛』に任務を

任せようと思うのだけれど、受けてくれるかしら？」

「勿論、お任せ下さい」

シルヴィアの言葉を受け、貴京は迷うことなく即答する。

その表情には迷いなどなく、笑みさえ浮かんでいた。

「ふふっ、それじゃあこの書類にサインして」

そう言って差し出された書類に、貴京はサラサラと流麗な文字でサインして行く。

それを見ながら、シルヴィアは任務の詳細を口頭でも説明する。

「任務達成期限は1年以内、それ以内に達成されなかった場合はこちらから応援を送るわ。

任務中の経費は基本的に局が持つけど、あまりに私的な理由なら貴方の給料から

問答無用で引いておくからそのつもりで」

「了解っと」

サインを終えた貴京が書類をシルヴィアに手渡し、シルヴィアはそれをチェック。

記入漏れなどが無いことを確認し、通常ならこれで任務の要請と受理は終了なのだが、

「最後に二つ」

「ん？」

既に踵を返し、部屋の外に出ようとしていた貴京の背中に声が掛かる。

「一つは可能ならという範囲での追加条件、いわゆるサブクエストね。

アルカディアは比較的魔法技術が進んでるみたいだから、もし局でもやって

行けそうな人材を見つけたらスカウトして貰えると嬉しいわ」

常に新しい人材を欲している全次元平和管理局では、新しい人材のスカウトも

常日頃から行っており、任務の追加目標として提示されることはそこまで珍しく無い。

「ふむ、了解だ。もう一つは？」

「こっちは絶対遵守条件：決して、死んでは駄目よ？」

微塵も冗談の気配が無い真剣なその言葉に、貴京は一瞬驚いたような表情を

浮かべたが、その表情はすぐに消え――

「約束するよ、シルヴィア」

何者をも安心させる様な不敵な笑顔でそう返して、部屋を出た。

「ふふっ、行ってらっしゃい、貴京」

その背にそう声を掛けるシルヴィアの表情は、安心で綻んだ、優しいな笑顔だった。

第1話『任務受諾』（後書き）

やはりストックを作ってから投稿すべきかッ!!

感想や評価などお待ちしております。

第2話『異世界への旅立ち』

「——ということで、今回の任務はそんな感じだ、OK？」

「はい、分かりました」

全次元平和管理局Aブロック、隠し通路最奥『神衛執務室』

神衛に所属する部隊員を除けば、局でもほんの一握りの上層部しか存在を知らない

隠し通路、その最奥に存在する神衛執務室と呼ばれる部屋。

たった2人の局員で構成された部隊の為に作られたその部屋の中に、

シルヴィアから任務を受けた神衛部隊隊長『御神貴京』と、ライゼルに本を届け終え、

今しがた任務の内容を聞いた神衛部隊隊員『アリシア・フォン・クラッツベルン』の姿があった。

「しかし、バグによって生まれた魔王の討伐：ですか」

「ああ、何があるか分からんから、気を引き締めて行くぞ」

「はい、分かりました……でもまあ、貴京様に任せておけば何とかなりそうですね」

涼やかな笑顔を浮かべてのアリシアのその言葉に、貴京はあからさ

まに顔を顰める。

「お前：俺に任せておけばなんでもかんでも何とかなると思っ
てないか？」

「え？ ならないんですか？」

その疑問の声と表情はどう見ても素である。

「いやそりゃなるわけ…なるわけ…なるかもなあ…」

なるのかよ。

「ですよー」

「ま、まあそれでも！！用心するに越したことは無い、良いな！！」

「はーい」

一見先生に遠足前とかで注意を受けてる絵にも見えなくない、少な
くともこれだけ

見たら魔王討伐に赴く部隊だとは誰も思わないだろう。

「さて、それじゃあ行くか」

気を取り直して貴京はそう言うと、何気ない動作で右腕を軽く振る。

それだけで空間が裂かれ、人1人が楽々通れる空間の裂け目の出来
あがりである。

「見た目は真っ黒な空間の裂け目だけど、いつも通り座標指定はちやんとしたから、飛び込めば向こうの世界に付けるはずだ、心配はいらない。大丈夫だ、問題無い」

無駄に安全性を強調する貴京を見つつ、アリシアは達観したような調子で言う。

「今の動作だけで次元を越えるゲートを作るなんて…相変わらず規格外ですね」

「ふっ、褒め言葉として受け取っておくよ」

貴京は軽く笑ってそう言うと、アリシアより先に微塵も躊躇せず空間の裂け目へ飛び込む。

「ええ、褒めてますから」

その後が続くように、すぐさまアリシアも空間の裂け目に飛び込み、ゲートが自動で閉じられた。

こうして、貴京とアリシアは、異世界に降り立った――

第2話『異世界への旅立ち』（後書き）

短いッ!!

感想、評価などお待ちしております。

第3話『男性は野郎、じゃあ女性は?』(前書き)

タイトルは本編とはほとんど関係ないです。てか全く関係ないと言っても支障は無いレベルで関係ないですすいません。

第3話『男性は野郎、じゃあ女性は?』

「ここが、『アルカディア』か…」

「なんというか…『森』ですね」

「『森』だな」

貴京とアリシアの2人がアルカディアで最初に降り立った場所、それは木々が鬱蒼と生い茂る森の中だった。

といっても、別に考え無しに降り立ったら森だったとかいう訳じゃない。

「ここから徒歩で15分の場所に『フォルアス』という中規模の街があるらしい。
まずはそこに行くぞ」

「分かりました」

任務を受ける時にシルヴィアから受け取った資料の一枚を見ながら貴京がそう言う。

そこに記されているのは、『アルカディア』の基本情報はもちろん、今回貴京が次元間移動ゲート（空間の裂け目）の座標指定に用いた座標などである。

あらかじめ局の方で、『人目に付きにくく、なおかつ街や村が近い』
という条件の
場所を転位ポイントとしてピックアップしてくれているのだ。

貴京はそれを見て座標を指定し、こうして比較的近くに街がある森
の中に無事
転位できたわけである。

といっても――

「貴京様」

「なんだアリシア」

「見てください、可愛いわんちゃんですよ」

「あれが犬に見えるんなら眼科に行けこの野郎」

「乙女に向かって野郎とはなんですかッ!!」

そんなコントを繰り広げる2人の視線の先、10 m程離れた場所に
いるのは一匹の狼。

それもただの狼では無く、明らかに全身から『俺モンスターですよ』
的なオーラを
発する体長5 mを優に超えそうな巨大な狼である。

そう、いくら局の方でピックアップされた座標といえども、現地で
の安全までは
完全に確保することは出来ない。

比較的安全性の高い場所が選ばれているはずであるが、あくまで最低ラインは

立地的安全性のみである。

こうして実際に転位してみると、モンスターとエンカウントしたり、運悪く現地の

住人と鉢合わせ、なんてことも割と良くあるのだ。

「さて、どうする、あいつから見たら間違いなく俺らは餌に見えてるだろう訳だが」

「でしょうね…でもまあ、当然食べられるのは嫌なので、貴京様、やっちゃってください」

完全に丸投げする部下に、^{アリシア}貴京が顔を顰める。

「お前…こういうのは基本部下が——」

——ザワツ!!

しかし、貴京の抗議の言葉は途中で途切れた。

こちらを見定めるようにじっとして動かなかった巨狼が、完全に狙いを定めた

言外に宣言するかのように、刺す様な殺気を放ってきたからである。

それにより抗議の言葉を止めた貴京だが、当然その顔はさらに顰め

られることになる。

「お前まで邪魔をするのか……雑魚が」

——ゴォッ!!

瞬間、アリシアと巨狼は貴京を中心に風が渦巻いたように“感じた”。

そう、感じただけ、それは本来実体を持たないはずの殺気。

巨狼の殺気などとは比べ物にならないほど濃密な殺気が、貴京から発せられる。

そのあまりの威圧感に、巨狼は生まれて初めて、明確な死の気配を感じた。

明確な死の気配を感じたのだから、次の瞬間には野生の本能に応じて逃げ出したかもしれない。

しかし、それは叶わなかった、巨狼が死の気配を感じた瞬間には全てが決着していた。

「この程度の動きにも反応できないのか、本当に雑魚だったな」

響き渡る冷やかな貴京の声、先程まで巨狼から10 m程離れた場所にいたはずの貴京は、
いつの間にか巨狼の目と鼻の先に立っていた。

そしてその手に握られているのは、鞘から抜かれた一振りの西洋剣。普段貴京が腰に帯びているその西洋剣は、今は巨狼の眉間に根元まで深々と刺さっていた。

「狙った獲物が悪かったな：『炎神の戯れ』^{バーニング}」

『炎神の戯れ』の一言と同時に、西洋剣の剣身に複雑な魔術式が走る。

次の瞬間、全てを焼き尽くす業火がその剣身から溢れ出た。

巨狼の眉間に刺さったままの剣身から溢れ出た灼熱の業火は、完璧な指向性を
持って巨狼の体だけをあつという間に焼き尽くす。

5m以上あったその巨体が灰も残さず燃え尽きるまで、10秒もかからなかった。

「相変わらず、規格外に強いですね、貴京様は」

貴京が巨狼に殺気を向けてからずっと黙っていたアリシアが、ひよこひよこ

小走りで寄って来ながら言う。

「今のなんて力を出した内にも入らん、良いから行くぞ」

それに対し貴京は、明らかに無然とした態度で剣を鞘に納めると踵を返し、

アリシアを待たずにスタスタと歩き始める。

「ああー待って下さいよ！そんなに怒らないで！！」

「一度上下関係について、しっかり覚えさせる必要があるか…」

「ひっ！？ちょ、待って下さい貴京様！！ちゃんと部下らしくしますから！！」

一瞬、非常にドスの利いた声で貴京が呟いたのを聞き、アリシアは涙目になりながら後を追う。

こうして、ちょっとしたトラブルがありながらも、貴京とアリシアは『アルカディア』

にやって来て初めての街、『フォルアス』を目指すのだった。

第3話『男性は野郎、じゃあ女性は何?』 (後書き)

相変わらず短い。

ストックが無いよーッ!!

感想、評価など、お待ちしております。

第4話『律儀な衛兵と観光都市フォルアス』

「ほう…これは」

「わー、凄いですね!!」

フォルアスがはっきり見えるほど近くにやってきて、貴京とアリシアが最初に放った言葉は、それぞれそんな言葉だった。

内容こそ違えど、2人共その言葉に込められた意味は『感嘆』。

巨狼とのエンカウントにより少々機嫌を損ねた貴京と、それによって身の危険を感じて涙目になっていたアリシアだったが、それを一瞬にして忘れてしまうほど、フォルアスは美しかった。

規模こそ書類に書かれていた通り中規模であるが、道はしっかりと整備され、建物は全て純白の石造り、道の脇に開かれている露店の配置もしっかりと決まっているのか、全体的に調和のとれた非常に美しい街並みである。

「まさか此処まで綺麗な街並みとはな、適当に情報収集だけでもっと大きな街に今日は泊まるつもりだったが、ここで一泊するのも良いかもしれん」

「そうですね、私も賛成です」

そんな言葉を交わしながら歩く2人は、あっという間にフォルアスの入口までやってきた。

仰々しい門などはないが、石造りのゲートのような物の横に、小さな小屋が建っている。

その前に1人、中に1人、衛兵らしき人物が見えるため、恐らく関所なのだろう。

「その2人、止まってくれ」

そう貴京が予想した通り、ゲートの目の前まで来ると、小屋の前に立っていた

衛兵がこちらへと寄って来て、一度静止を求められる。

当然無視する理由など無いので、その言葉に従って止まり、頭を下げる。

「お勤め御苦労さまです」

挨拶は基本である。

社会的にも——情報を多く必要とする仕事の都合としても

「いえいえ、旅の方ですか？」

貴京の挨拶に一瞬驚いたような顔をした衛兵だが、すぐに笑みを浮かべると、そう聞いてくる。

「ええ、こっちの：妻と一緒に旅を」

一瞬アリシアのことをなんと説明するか迷ったが、従者というのはちょっと違うし、

身なりのにも妻の方が良さそうだったので妻と説明する。

「成程、お綺麗な奥さんですね」

「ありがとうございます、ふふっ」

衛兵の言葉に、相手の警戒心を丸ごと消し去る様な柔和な笑みを浮かべるアリシア。

上司に面倒事を丸投げしたり、ちょっとした冗談で涙目になったりなアリシアだが、

実際は局でも実力者の部類に入る非常に優秀な局員であり、相手の警戒心を解くのもお手の物である。

「『フォルアス』についてはご存知ですか？」

「いえ、名前位しか…」

殆ど警戒心が無くなっている衛兵の問いかけに貴京がそう答えると、衛兵が最低限

知っておく必要のあるフォルアスでの注意点を告げる。

「でしたら、私の方から一つ注意を。此処フォルアスは、近隣でも美しいと評判

の景観が自慢の街です。貴方達は違ったようですが、街並みが見た

いという理由

で訪れる方も少なくありません。商業も産業もあまり盛んでは無いこの街は、

『観光収入』が大部分を占めています。なので当然、ゴミのポイ捨てなどには非常

に厳しいです。最悪の場合衛兵に逮捕されることもありますので、十分ご注意ください」

「はい」

「分かりました」

ゴミのポイ捨てなどで逮捕され、もし任務に支障でもきたしたら面目丸潰れである。

絶対に気をつけようと、貴京もアリシアもしっかりと心に留める。

「重要な注意点はこれのみです。これにさえ気を付けていれば、他の街と大した違いはありません」

「成程、ありがとうございました」

「いえいえ、それでは、フォルアスにようこそ——」

一通りやるべきことは済んだのか、衛兵は道を開け、貴京たちをフォルアスの中に招き入れようとするが——

「あ、その前に一つ」

それを遮ったのは、他でも無い貴京だった。

「何でしょうか？」

貴京の言葉に思わず首をかしげる衛兵。

まあ、この流れでどんな質問が来るのか予想出来るのは相手の心が読める人物位だろう。

「あそこの、あの森。普通にモンスターがいますよね？目と鼻の先にある森の中にモンスターがいるのに、外壁が無いどころか、街の警備がこんな手薄で大丈夫なんですか？」

そう言って貴京が指差すのは、先程巨狼とエンカウトした森である。

巨狼とエンカウトしたのは比較的街と離れた地点だったが、森自体は街のすぐ

近くまで続いている、直線距離で200mと言ったところだろうか。

これほど至近距離にあるのだ、モンスターが森から出てきて街を襲うという可能性

は比較的、というよりかなり高いだろうと予想した貴京だったのだが、

「ああ、それならご安心を」

返って来たのは衛兵のそんな楽観的な言葉と、笑みである。

「?…どういふことですか？」

「その森、『宵闇の森』というのですが、『宵闇の森』のモンスターは闇を好みますので、

基本的に森の外には出てこないんです。夜になればその限りではありませんが、

この関所で明かりを焚きますので、夜もモンスターが街を襲いに來る可能性はほぼ皆無です」

「成程…」

衛兵の言葉に貴京は納得して頷く。

「ですので、安心してフォルアスでの滞在をお楽しみください」

そう言って再び笑みを浮かべる衛兵。

どうやら街の安全性に疑問を感じての質問だったと思ったようだが、実際はただの興味である。

「ご丁寧にありがとうございます」

といつても、特に正す必要があるわけでもないのです、貴京はその言葉に頷いて礼を言う。

「いえいえ、それでは、改めまして、フォルアスへようこそ！」

今度こそ衛兵のその言葉と共にゲートをくぐり、フォルアスの大通りへと足を踏み

入れる貴京とアリシア。

ちなみにその瞬間貴京が考えていたのは、『改めて言い直すなんて律儀な衛兵さんだなー』

とかいうフォルアスと全くと言っていいほど関係ないことだったのだが、

それに気付いた者は当然いなかった。

第4話 『律儀な衛兵と観光都市フォルアス』（後書き）

アルファポリスに登録してみました。

私の小説を気に入っていただけたなら、是非バナナをクリックして貰えると嬉しいです。

第5話 『宿での採め事は最早テンプレ』 (前書き)

テンプレ、だよな？

第5話『宿での採め事は最早テンプレ』

『見た感じはかなり綺麗だったが、実際歩いてみると見た目ほどでは無かった』

というのは貴京が今まで訪れた観光都市で、何度か抱いた感想である。

歩いてみても見た感じと感想が変わらない都市と、実際歩くことによって評価が

少しばかり落ちる都市、割合は4・6といったところだろうか。

しかして今回訪れた観光都市『フォルアス』は、前者の4割に入る都市だったようだ。

街を歩く人々も活気に溢れており、非常に良い街だと思う。

「その兄さん!! 今日の良い肉が入ってるよ!! どうだね? 串焼き一本!!」

「いやいや兄さん! こっちの果物こそあんたには似合うよ!!」

「ははは、また時間がある時に寄らせてもらいますよ」

大通りを歩いていると、道の両端に軒を連ねる露店から引っ切り無しに客引きの声が掛かる。

どれも中々に興味を惹かれるのだが、残念ながらも今日は泊まる宿を探さなけ

ればならないため、時間が無いのだ。

本来なら今日は別の街に泊まる予定だったのだが、貴京もアリシアもフォルアスを結構気に入ったため、今日はフォルアスで一泊することにしたのだが：

「うーむ、宿あるかなあ」

なんといっても、この美しい景観を持った観光都市である。

当然観光客も多く、宿泊客も多い。

それに合わせて宿の数も相当数に上るのだが、当然宿の品質にはピンからキリまである。

せっかく宿泊するのだ、できる事なら快適な宿に泊まりたいというのが人の心理である。

宿泊費も局の経費で落ちることだし。

そのため、できる限り早く宿を確保したいという意味で『時間が無い』なのだ。

日没までの時間という意味でなら、現在はまだ昼前なのでかなり時間はある。

ちなみに現在貴京は1人で歩いており、アリシアとは別行動である。

街に入ってしばらくは一緒に歩いていたのだが、貴京が宿は俺が探

しておくからと、
情報収集を命じたのだ。

現在は街の色々なところでフォルアスについてのこと、近隣についてのこと、

そして魔王のことなどを聞いて回っていることだろう。

戦闘においては万能を誇る貴京だが、どうも情報収集や諜報などは得意じゃないのだ。

なので、基本的に情報収集はアリシアの役目である。

『うるせえつつてんだよ!!!』

『お客さん! 止めてください!!!』

「ん?」

と、スタスタ足早に歩いているように見えて、実はしっかり道の左右どちらの宿に

も気を配りながら、良さそうな宿があったら入ってみようと思っていた貴京の耳に、

男の怒声と、女性の叫び声が入る。

「あの宿か…」

音源に目を向けると、そこにあったのは1軒の宿屋。

見た目も雰囲気も中々良さそうだが、先程の声的にやはり中で何か揉め事が

起こっているのか、先程から何人もの人々が逃げるように飛び出してきている。

「…ふむ、行きますか」

一度気付いた争い事をそのまま見て見ぬふりするつもりは無いし、何より結構良質そうな宿屋だ。

運が良ければ泊まれるかもしれないと思いながら、貴京は先程以上に足を速めてその宿屋へと入って行った。

第5話『宿での採め事は最早テンプレ』（後書き）

今回も相変わらず短いッ!!

明日と明後日は休日なので、1日2話更新とかしたいなと思ってたり。

感想、評価などお待ちしております。

第6話『中年男と剣と、神速の刺突』

「お邪魔しま——うわっと」

宿屋の入り口をくぐった貴京の目にまず入ったのは——飛来するビールジョッキ。

最早視界いっぱいと言っても過言では無い程に迫っていたそれを、貴京は驚異的な反射神経と身体能力で掴み取る。

「危な：俺じゃなかったら顔面直撃だぞ…」

そう呟きながらビールジョッキを落とさないように握り直し、貴京が宿の奥に目をやると、

「お客さん！！なんてことを！！」

「うるせえ！！俺に指図するんじゃないねえ！！」

カウンターの近くで店の関係者と思われる女性と、顔を真っ赤にした中年の男が口論を繰り広げていた。

店の関係者と思われる女性と中年の男は、中年の男がカウンターに背を向ける形で向かい合っており、その近くには酒の肴と思われる料理が数品置かれているが、肝心の酒が無い。

恐らくは先程飛んできたビールジョッキが本来あの場所にあったのだろう。

投げたのは…見た感じは中年の男の方か、と貴京が当たりを付ける。

「しかし…あのおっさんの恰好は…」

貴京が目を付けたのは中年の男の服装。

それは先程、フォルアスの入り口にある関所に立っていた衛兵と同じ鎧だった。

つまり普通に考えると、あの中年の男は衛兵ということになる。

「うーむ、いくら酔ってるといっても衛兵があんな暴挙に出るか？
そもそも衛兵

ならあんなになるまで飲むとは到底思えないんだが…」

顔が真っ赤であるし、ビールジョッキが空だったことから中年の男が酔っていることはほぼ間違いないのだが、それでも此処までの暴挙は些か異常である。

そもそも衛兵、さらに老練そうな中年の男が自分を見失うとは思えない。

酒以外にも恐らく理由がある。貴京はそう思い、もう少し情報を得ようと、周りの

野次馬達に声をかけようとしたのだが――

「これ以上周りの人に迷惑を掛けるようなら、今すぐ此処から出て行って――」

「ええい!! うるさいと言っているだろう!!」

響く怒声と共に貴京が感じたのは微かな殺気。

自分に向けられたものではないためほんの微かだが、それでも一気に振り撒かれた分はつきりと感じられるそれは、一際大きな怒声を発した中年の男からのものだった。

「きゃっ――!?!」

短く響く女性の悲鳴、事態に気付きどよめく野次馬。

――腰に伸びる、中年男の手。

中年の男の恰好は、関所に立っていた衛兵と同じものである。

そう――腰武装の剣に至るまで。

「——ちっ!!」

貴京は短く舌打ちすると、周りの野次馬に声を掛けるため踏み出そうとしていた右足に通常の数倍の力を込めて床を蹴る。

莫大な力を受けた床板が軋み、貴京の体が驚異的な速度で加速する。

その身に纏った漆黒のロングコートを翻し、残像を残しながら貴京が駆ける。

残像を残すほどの圧倒的速度、宿屋の入口とカウンターほどの僅かな距離を詰めるのに要する時間など、ほんの一瞬。

瞬く間に中年の男に接近した貴京は、これまた残像を残すほどの速度で腰の剣へと手を伸ばし、そのまま流れるような動きで抜刀。

刺突の要領で、未だ3分の1程度しか抜かれていない中年男の剣を横から串刺しにする。

——ギャギンッ!!

響く金属音と共に、横から突き刺され根元から真っ二つに折れる中年男の剣。

周囲の人間は勿論、女性にしても、中年男にしてもまさに一瞬の出来事。

その一瞬でこの争いの中心に立ってしまった貴京は、とりあえずは事無きを得たことに安堵しつつも、少々厄介な事になったと顔を顰めた。

第6話『中年男と剣と、神速の刺突』（後書き）

今回も安定の短さ。

1日1回更新を目指すとしても短くなってしまおう：

長さを犠牲に1日1回更新が良いのか、それとも更新速度を犠牲にしても長い方がいいのか：

できる限り更新速度と長さの両立を目指しますが、皆さんの意見も聞きたいです。

是非感想の方で意見を貰えると嬉しいです。

それでは、感想、評価など、お待ちしております。

第7話『事態の収束と、宿泊先』

パチンツ、という納刀の音が辺りに響き渡る。

先程までと打って変わって、それほどまでに現在の宿屋は静まり返っていた。

驚きのあまり、貴京以外の全員が固まってしまっているのだ。

「…っ…てめえ!!」

しかし、石化の魔法を食らったわけでもないし、驚きによる硬直はあっという間に解ける。

他の者より数瞬速く我に返った中年の男は、最早切断どころか、相手を殴ることすら不自由するレベルになってしまった剣（の柄）を投げ捨て、貴京へと掴みかかった。

「おっと」

勿論、そのまま良いようにされるつもりなど毛頭ない貴京は、自らの胸倉へと伸びてきた中年男の右手を左手でがっしりと掴み取る。

身長は高いが細身な貴京に対し、中年男は身長こそ貴京に及ばないものの、その体格はかなりがっしりしている。

傍から見れば、10人中7人は中年男の方が力は強いと予想するだろう。

しかし――

「ぐっ、このっ！」

貴京は全次元平和管理局でも最強の部類に入る男である。

見た目での評価なんて役に立つ訳無いのだ。

その膂力や握力は常軌を逸するものであり、がっちりと掴まれた中年男の右手は、押しても引いてもびくともしないという状況に陥っていた。

「離せてめえ!!」

「自分から掴みかかっておいてそれは無いだろう…」

酒臭い息を吐きながら怒鳴り散らす中年の男に対し、貴京は呆れた様な表情を見せ、右手を中年男の胸へと宛がう。

「とりあえず、俺も危害を加えられそうになったわけだし、これは正当防衛だ。

それに、状況を把握するにはしばらく大人しくして貰った方が良さそうだしな」

「あ？何を――」

――ベコンッ!!

「がっ…あ…」

中年男の胸から鈍い金属音が響くと同時、その体から力が抜けて床に崩れ落ちる。

見ると、貴京が右手を当てていた鎧の胸当て部分が、まるで鈍器で殴られたかのようにベツコリとへこんでいる。

『堅牢に作られているはずの鎧が手を当てただけでへこんだ』

その常識外の光景に、間近で見っていた女性や近くの野次馬達が目を丸くする。

実際は手を当てた後、掌から魔力を直接放出することによって男が気絶する程度の衝撃を与えたのだが、それに気付く者はこの場にはいなかった。

「あ、あの…」

「ああ、状況把握の邪魔になりそうだったので、少々気絶して貰っただけです。1時間もすれば目を覚ましますよ」

あまりに激しい状況の移り変わりにオロオロしている女性に、貴京は微笑みながら言葉を返す。

目を覚ました後の反応が少々面倒そうだが、たかが掴みかかれた

位で殺す訳にはいかない。

しばらくは胸の痛みが取れないかもしれないが、それもしばらくすれば治るだろう。

これだけの騒ぎを起こし、止めなければ人を殺していたかもしれないのだ、多少の怪我我慢して貰おうと、貴京は考えを完結させる。

「さて、それじゃあ静かになったところで、状況を説明して貰えますか？」

「あ、分かりました――でもその前に、ありがとうございました。貴方がいなければ私はその男の人に……殺されていたかもしれない」

恐怖がよみがえったのか、顔を青ざめさせる女性に、貴京は優しく言葉を掛ける。

「いえいえ、助ける力があるのなら、誰でも同じような行動をしましたよ」

感謝の言葉を受け取りつつも、『助ける力があるのなら』という発言によって野次馬が行動しなかった点を擁護する貴京の言葉に、女性には優しい微笑みを浮かべる。

「貴方は、お優しいんですね」

「優しくあろうと、努力はしています」

貴京と女性がお互い笑みを浮かべるその光景は、つい先ほどまで繰

り広げられていた争いを微塵も感じさせないものだった。

「それじゃあ、説明しますね、まずは――」



「――そこで貴方が現れた、ということです」

「成程、そう言うことでしたか」

状況を纏めると――

中年の男は、元は衛兵だったのだが、今日、この宿屋にやってくる前に衛兵をクビになったらしい。

理由は中年男の勤務態度の悪さ、酒癖が悪く、警邏中に酒を飲んで
いることさえあったとか。

勤務態度以外の能力はそこそこ優秀ということで今日まで衛兵を続けられていたが、先日、街の酒場で警邏中に酒を飲み泥酔、そこを上司に見つかり、ついにクビになったらしい。

それにより衛兵の宿舎からも追い出されて宿無しになり、この宿に

やってきて、1階に併設されている食堂で自棄酒をあおり、自らを見失うほどに泥酔。

飲み過ぎだと心配した女性に逆ギレし、先程の争いに至る、ということらしい。

そう説明してくれた女性の状況説明は非常に分かりやすく、それでいて簡略化されており、貴京でも感心するほどだった。

「しかし、そうなるの一つ疑問が」

「？」

首を傾げる女性を見つつ、貴京が床に倒れ伏している中年男——より正確に言えば中年男が纏っている鎧を指差す。

「衛兵をクビになったのなら、鎧や剣も返却されるのでは？この鎧や剣は衛兵としての支給品でしょう？」

「そういえば…そうですね」

女性が今思いついたような反応を見せるが、いきなり逆ギレされて果ては殺されかけるほどの体験をしたのだ、細かな事を考えている余裕が無かったのは当然だろう。

「何故なのでしょう…」

「普通に考えれば、返却は後日で良いと言われたとか、クビにされ

たことに怒って返却させずに此処にやって来たとか…後者の方が確率は高そうですね」

「そうですね」

と、俺と女性が2人して悩んでいると。

「失礼する！！通報を受けてやってきた！怪我人はいないか！！」
入り口から響いたそんな言葉と共に、3人の衛兵が宿の中へと入って来た。

どうやら、野次馬の誰かが衛兵に通報したらしい。

流石に人に向けて剣を抜こうとした男だ、貴京自身もそのままにしておき気は無かったので、手間が省けたと思って衛兵を呼び込む。

「剣を抜こうとしたのを力ずくで止めたのですが、その結果暴れようとしたので少々無理矢理取り押さえました。気絶しているだけですが、しばらくは胸に痛みが残るかもしれません」

そう言って床に倒れ伏している中年男を指差す。

「む、成程、やはりこいつが原因か――いや、事態の収束、感謝する。実に面目ないことなのだが、この男、衛兵を今朝クビになっただ。その時に装備を返却せずに飛び出して行ったから、搜索していたところなんだ…まさかこんな事件を起こすとは…貴殿がいなければ今頃どうなっていたか分からん、本当に感謝する」

隊長らしき衛兵がそう言って頭を下げ、後ろに控えていた2人の衛

兵も同じく頭を下げる。

「いえいえ、できることをやったまでです。私に対する感謝の言葉はいりません。…ただ、こちらの女性、その男に殺されるかもしれない女性です。彼女に対する謝罪の言葉ぐらいは要求したいですね」

貴京がはっきりした口調でそう告げると、隊長らしき衛兵がハツとした顔で女性に頭を下げる。

「私達の不祥事で怖い思いをさせてしまったようだ、誠に申し訳ない！心から謝罪する！」

「え、あと、いえ、私は大丈夫でしたし」

大の男3人に頭を下げられ流石に困惑する女性。あたふたしたあげく、貴京に助けを求める様な視線を送ってきた。

「まあ、今回は特に大きな問題は無かったことですし、このような事がもう起こらないよう、宜しく願います」

女性が若干涙目だった上に、そろそろ疲れて来た貴京は、事態を完全に終わらせるべく衛兵に言葉を掛ける。

「ああ、全力で再発防止に努めよう。本当に貴殿には感謝する。ついては、後日改めて礼をしたいので、できれば住所を教えてもらいたいのだが」

「あー、俺は旅の者でして、この街に家は無いんですよ」

「む、そうか…それなら…うーむ」

貴京の言葉に、真剣に悩み始める衛兵。

そこまでして改めての礼を貰うつもりが無かった貴京は、遠慮する旨を告げようとしたのだが、

「あの、それなら、この宿に宿泊されませんか？」

「え？」

それよりも先に、女性がそんな言葉を発したのだった。

第7話『事態の収束と、宿泊先』（後書き）

今回の話しは若干纏まりが無いかも…

もっと精進せねば!!

感想、評価など、お待ちしております。

第8話『宿泊先決定!!』

「命を助けて貰った恩もありますし、無償で宿泊して貰って構いません。それとも、迷惑、でしょうか？」

「え、いや」

上目遣いでそう聞いてくる彼女の瞳は微かに潤んでいるように見えて、こんな時何故女性は此処まで断りづらい表情をするんだー!!と、断るつもりも無いのに貴京は無意味に葛藤する。

「おお、それは良いですな、それならこちらもお礼がしやすい!!」

「そうですよね、あの、どうでしょうか」

衛兵の言葉もあり、女性がさらに一步踏み出してくる。

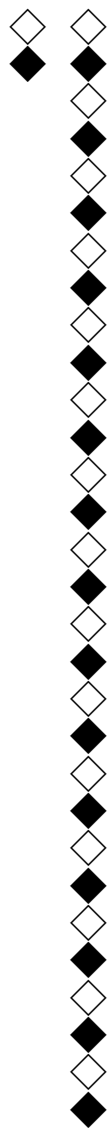
「まあ、こちらとしてはまだ宿も決まってませんし、嬉しい限りですが…」

こうなると、貴京の返答が拒絶な訳が無かった。

そもそも断る理由が無いし、もし何かしら理由があったとしても、大したことじゃなければ無理を押し通しても泊まることにしていただろう。

だって男だから、美人の頼みはそうそう断れるものではないのだから。うん。

そうやって、心の中で誰にともなく言い訳する貴京であった。



「それでは、あまり大層な物是用意できないかもしれませんが、また後日お礼に伺わせてもらいます」

「いえいえ、お礼を頂けるだけでもありがたいですから」

「できる限りのお礼をさせていただきます。それでは、失礼しました」

そう言って頭を下げて、3人の衛兵は元衛兵の中年男を担いで帰って行った。

衛兵が来た辺りから野次馬は散り始めていたため、今ではもう食堂は物が少し散乱している以外普通の風景に見える。

元々この普通を知らないのも、あくまで見えるだけだが。

「あの、本当にありがとうございました」

と、衛兵たちが去って行った方をなんとなく眺めていた貴京の背中に、再び女性の感謝の言葉が掛かる。

「いえいえ、そう何度も頭を下げないで下さい。こっちの方が申し訳なくあります」

「でも…」

「宿にも泊めてくれるのでしょうか？それだけでもお礼は十分どころか多すぎます」

この宿、外装も悪くは無かったが、内装はさらに見事だった。

一般的な宿に勝るのは勿論、高級宿と言っても過言では無さそうな内装である。

そんな所に泊まれるというのだ、それだけでお礼は十分である。

まあ、無償で泊まる気は無い。アリシアのために2部屋取らなければいけないし。

「ただ、一つお願いを良いでしょうか？」

「为什么呢？」

「できれば二部屋取りたいのですが、あ、宿泊料金はちゃんと二部屋分払います」

「あ、はい。二部屋ですね、構いませんよ。それと宿泊料金は二部屋とも無償で結構ですよ」

「いやいや！流石にそれは——」

無償で良いと言われる可能性が高いとは思っていたが、流石に二部屋無償は多過ぎる、そもそも元は一部屋の提案だったのだ。

せめて無償は一部屋だけにして貰おうと貴京が口を開いたのだが――

「いいえ、二部屋とも無償で結構です。これは私からのお礼なんです。助けて貰ったお礼も満足にできない人に私をしないで下さい」

「う…ぐっ…」

こういわれると、返す言葉が無くなる。

「分かり、ました。ご厚意に甘えさせてもらいます」

「はい、ごゆっくり宿泊して行って下さい。そうだ、自己紹介がまだでしたね。私は『セレナ・アーベルム』、この宿の主をしています」

「あ、俺の名前は――『御神貴京』、ここ風に言うと『キキヨウ・ミカミ』ですね。連れと一緒に旅をしています」

本来なら、関所で衛兵に言ったようにアリシアのことは妻と言うのが矛盾を生まずに良いのだが、貴京はとある考えからその嘘を使うのは避けた。

ちなみに名前を言う前の一瞬の間は、漢字の名前で大丈夫か、シルヴィアから貰った資料にあった『漢字圏も存在するため偽名を使わずともOK』の記述を思い出すための沈黙である。

「ミカミ様ですね。成程、もう1人はそのお連れ様の部屋でしたか」

「ええ、今はちょっと別行動中なんですけどね。それと、俺のことは貴京で良いですよ」

そう言うで一瞬躊躇ったようなセレナだが、すぐに頷き言葉を返す。

「分かりました、キキョウ様。私のこともセレナと気軽に呼び下さい。敬語も必要ありません」

「ん、セレナ、分かった。俺にも別に敬語は使わなくて——って、それは職業上仕方ないか」

「はい、お客様に敬語を使うのは基本中の基本です」

セレナはそう言ってニッコリ微笑むと、流れるような動作で貴京を宿の奥に案内しようとする。

「それでは、お部屋の方にご案内を——」

「あ、まだ良いよ。連れを迎えに行かないといけないし。片づけとかもあるでしょ？」

しかし、貴京はそれを遮る。

先程の争いによって、食堂には少なからず物が散乱しているし、アリシアには宿を見つけたら魔法による念話で場所を連絡する手はずになっているのだ。

「分かりました。では、いつでも声をおかけください」

「了解」

そう言って、ひとまずセレナに背を向けて宿の外に出る貴京。

「さてと、アリシアに連絡を——」

「その必要はありませんよ、貴京様」

と、頭の中に念話の魔術式を思い浮かべようとした貴京の耳に入った声は、聞きなれたソプラノボイス。

透き通るようなその声の聞こえた方を向くと、そこにいたのは貴京の予想通り——

「おお、アリシア、良くこの場所を見つけられたな？」

貴京のその言葉に、微かな苦笑を浮かべるアリシアだった。

第8話『宿泊先決定!!』(後書き)

毎日更新!!

できる限りは毎日更新を続けて行きたいと思う今日この頃。

感想を書いて下さる方もいらっしゃって嬉しいです。

ますます精進して行きますので、これからも、よろしく願います!!

それでは、感想、評価などお待ちしております。

第9話『合流と、大切な任務』

「もしかして貴京様、その言葉本気で言ってます？」

「ん？」

微かに苦笑しながらのアリシアの言葉に、本気で先程の言葉を言った貴京は本気で首を傾げる。

それを見て苦笑を呆れた様な笑いに変えたアリシアは、今しがた貴京が出てきた宿屋を指しながら言葉を紡ぐ。

「『黒髪黒目で漆黒の礼服を纏った男性が、中年の衛兵と宿屋で争いを繰り広げている』つい先ほどすれ違った人が話していたのが偶然聞こえました」

その言葉に、貴京は自らの体に目を落とす。

漆黒のスーツに、漆黒のロングコート、靴も漆黒の革靴。

ちなみに黒髪黒目である。

「成程、俺か」

「そうです、貴方です。全く、急いで駆け付けて来たんですけど、何があったんですか？」

「何、人助けしただけだ。そう心配そうな顔をするな」

若干心配そうなアリシアに、貴京は手をヒラヒラと振って返答する。

「まあ、それならいいんですけど…」

「しかし、ついさっきの出来事だぞ？もう広まってるのか？」

貴京が騒ぎを聞きつけて宿屋に入ってから数えても、まだ10分経っていない、噂が広まるにはあまりに早過ぎると思ったのだが――

「いえ、別に噂の様に広まっている訳ではありません。偶然聞いただけです。」

多分私がすれ違ったのが野次馬の誰かだったのでしよう」

「ふむ、成程なあ」

しかし、この人通りの多い観光都市で、ただすれ違っただけの人の言葉をそこまで正確に聞き取るとは、本当に自分には真似できない諜報能力の高さだと貴京が舌を巻く。

「どうかしましたか？」

「いや、何でも無い」

感心するあまり凝視し過ぎたようだ、首を傾げるアリシアは非常に可愛らしいが、今はまず報告を聞かねばなるまい。

「とりあえず、この宿に部屋を2部屋取った。部屋に行って報告を聞くとしよう」

「畏まりました、貴京様」

部下モードに入ったアリシアの了承の返事を聞くと、貴京は早速踵を返し、アリシアを引き連れて宿の中に戻る。

先程まで物が散乱していた一角は既に片付けが終わっており、セレナの姿もカウンターにあった。

「片付けはやつ…」

「?———どうかしましたか？」

「いや、何でも無い」

自分の周りの女性は色んな方面でスペックが高過ぎないか?という疑問を抱いた貴京だが、とりあえず保留。

カウンターで何やら書類整理をしているセレナの元へ歩み寄る。

「セレナ」

「はい? あ、キキョウ様——えっと、そちらがお連れ様ですか？」

貴京が声を掛けるとすぐに顔を上げ、貴京を見た後アリシアの方を見るセレナ。

「ああ、連れの——」

「アリシア・フォン・クラッツベルンです。アリシアで構いません」

「あ、ご丁寧にも、私はセレナ・アーベルムと申します。セレ

ナとお呼び下さい、後、敬語も必要ありません」

「いえ、これが素の口調なんです」

「あ、そうでしたか、すいません」

「いえいえ、何やら貴京がやらかしたみたいで、申し訳ありません」

「いえいえ!!むしろキキョウ様には――」

と、アリシアとセレナ、いきなり会話に華を咲かせ始める女性2人。

「……………」

当然貴京はついて行けず、無言である。

楽しそうに話しているので、普段ならそっとしておくのだが、今は仕事が先である。

「ゴホン」

「あ、御免なさい」

「も、申し訳ありません…」

貴京がわざとらしく咳払いすると、ばつが悪そうに目を伏せて謝るアリシアと、本当に申し訳なさそうに頭を下げるセレナ。

貴京が逆に悶えそうになるほど申し訳なくなったのは言わずもがなである。

だが、アリシアの情報は、次元の平和を守るという大切な仕事の礎となるものである。

できるだけ早く聞いておく必要があるのだ。

「いや、楽しそうなところこちらこそ申し訳ない。だけど今日は時間が無いので、部屋に案内して貰えますか？」

心を鬼に。

外面は平静を保っているが、内面では2人、特にセレナに対する罪悪感で涙目である。

「はい、今案内します！」

カウンターから出てきたセレナに案内されて、2人は2階にある部屋にそれぞれ案内された。

「こちらの部屋で良かったですか？」

「ええ、アリシアとも隣同士ですし、部屋自体も文句のつけどころがありません」

セレナの最終確認にそう答える貴京、アリシアも隣でうんうん頷いている。

「ありがとうございます。それでは、私は基本的にカウンターにいますので、何かありましたらいつでもお呼び下さい」

「了解です」

「また後でさっきの続き、話しましょうね」

「はい！」

セレナは笑顔でお辞儀をすると、小走りで1階へと戻って行った。

「――さてと、それじゃあ、俺の部屋で報告を聞こうか」

「畏まりました」

セレナの姿が完全に見えなくなると、2人の雰囲気が変わる。

次元の平和を守るという大切な任務を帯びた2人は、静かに、貴京が宿泊する部屋へと入って行った。

第9話『合流と、大切な任務』（後書き）

後5分で日付が変わる…

危うく1日1回更新できないところでした。

まあ、そのうち1日1回更新できない日が来るとは思いますが、できる限り1日1回更新を続けていきたいですね。

ということで、感想、評価などお待ちしております!!

第10話 『情報整理とプラン決定!!』 (前書き)

色々詰め込み回

第10話 『情報整理とプラン決定!!』

「――『音鏡結界』」

――パチンッ

アイリスが部屋に入り扉を閉めた事を確認した貴京は、まず術の名を紡ぎ指を鳴らして、音を遮断するタイプの結界を張る。

――リインッ！

響くのは鈴の音の様な透き通った音。

術法に精通した者が聞けば、その独特な音は結界が展開される時の音だと気付いただろう。

全次元平和管理局の存在はどの次元、どの世界であろうと基本的に秘匿。

これから聞くのはこの世界『アルカディア』の情報だが、勿論その情報を得て今回の任務についての話しもする必要がある。

話を聞かれた程度で全次元平和管理局の存在が公になる可能性は非常に低い、用心に用心を重ね、できる限り存在を秘匿する。

それは全次元平和管理局に所属する全局員に課された義務である。

そのため貴京は音を遮断するための結界を張ったのだ。

「よし、これで音は絶対に外に漏れないはずだ。盗聴の気配も無い」

あっという間に存在秘匿のための必要事項を満たすその手際は、流石局でも数少ないオーバーSランク保持者といった感じである。

「それじゃあ、報告を聞こうか」

「畏まりました」

貴京が椅子に腰かけ、その正面にアリシアが立つ。

完璧な上司と部下の関係図で、アリシアの報告は始まった。

「まず魔王についてですが、既に新たな魔王が生まれていることは街の住人でも知っていることのようにです。この世界で魔王が生まれることは珍しいことではなく、有史以前からの出来事のようにです。勇者という概念は存在せず、討伐は様々な国々が連合を組み、討伐隊を編成して行うそうです。また、こちらは後ほど別に説明しますが、この世界には冒険者ギルドという組織が存在し、その冒険者ギルドからも精鋭が選ばれ討伐に参加するとか。先代魔王が討伐されたのは30年前。基本的に魔王は討伐されてから50年の周期で新たな魔王が誕生するらしいので、今回の魔王は20年近く速い周期での誕生となります。国も街の人々も、この点は疑問に思っているようです。今回の魔王の力に疑問を持っている者は、少なくとも街の住人達の中にはいないようでした。というよりも、まだ魔王が誕生したばかりでなんの情報も無いそうです。魔王の討伐隊は未だ編

成されておらず、通例どおりならばあと半年はしないと討伐隊は出発しないのではないかということでした。通常の魔王の強さは、局員のランクに換算するとAランク相当と見られます。魔王については以上です」

「ふむ：冒険者ギルドについては？」

「はい、冒険者ギルドとは、モンスターの討伐や要人の護衛などの依頼を受けて賃金を稼ぐ職業『冒険者』になるために絶対に加入しなければならぬ組織だそうです。特別な試験などは無く、登録さえすれば冒険者になれるそうですが、例えば何があろうと、たとえばモンスターに重傷を負わされようと基本自己責任だそうです。なお、冒険者にはランクが存在し、こちらは一定条件を満たすと受験可能となる昇格試験を受け合格できなければ昇格は不可、受けられる依頼にも冒険者ランクに応じたランク付けがされているようで、どちらも最下位が『G』、そこから『F』、『E』と上がって行き、『A』、『S』、『SS』と来て、最高位が『SSS』だそうです。表記は局のランク付けと同じですね。冒険者ギルドは国の垣根を越えて存在しており、登録者数は1億人を越えるとか、資料によるとアルカディアの全人口が約5億人ですから、相当の数ですね。現在最高位である『SSSランク』の保持者は100人ほどで、強さは局員のランクに換算するとAランク相当、つまり通常の魔王と同程度です。そのため、冒険者ギルドからSSSランク保有の冒険者が少なからず派遣されるのが常である魔王討伐において、苦戦を強いられたという記録は大して残っていないようです。私が調べた情報は以上です」

「成程、御苦労」

アリシアの情報を聞き、貴京は今後のプランを固めて行く。

——場を沈黙が支配すること約1分。

「よし、今後のプランが決まった」

貴京はそう言うと、自信有り気な笑みを浮かべながら今後のプランについてアリシアに説明を始める。

「まず、この世界の住人が魔王討伐に動き出すのは、通例どおりなら半年後らしいから、それまでには魔王を討伐することにしよう。俺らが出向く必要があるほどの力を持った魔王だ、この世界にも優秀な人材は結構いるようだけど、恐らく勝てないだろう。この世界の住人と魔王を戦わせて犠牲を出すのは避けたい」

「はい」

「だけれど、今すぐに魔王を討伐しに行く訳じゃない。別に今すぐ行っても俺なら勝てると思うし、むしろ今行った方が魔王も力を御しきれてないだろうから勝ちやすいだろう。だけど、それはしない、何故だかわかるか？」

「シルヴィア様に提示された追加条件、サブクエスト『優秀な人材の確保』を達成するためですね？」

「その通り、流石アリシアだ。1年という長い任務達成期限もそのためのものだろう。」

だからまずは、冒険者ギルドに俺らも登録して、この世界での強者を探す。そして目ばしい人材がある程度見つけたら、その者たちと共に魔王を討伐。その後、できることならその者たちのスカウトを成功させ、局へと連れ帰る——これが俺が考えたプランだ、どうだ？」

「良いプランだと思います。私は貴京様に賛成です」

アリシアの賛成を受け、貴京は大きく頷くと椅子から立ち上がり笑みを浮かべる。

「よっしゃ！決定だ！！」

——シャリイン……

貴京の大声での宣言と共に、ガラスが碎ける様な音が響き結界が解除された。

「うーん！」

話し合いを行っていたのはたった数分なのに、さぞ疲れたように伸びをする貴京。

つくづく上役に向かない男である。

「しかし……」

「？」

「アリシアは本当に凄いな、あの短時間でよくあそこまで調べられたもんだ」

現時点で調べるべき項目は全て網羅する情報量、少なくとも自分ではあの半分も情報を集められなかっただろうと貴京は改めて舌を巻き、感心したように頷く。

それに対し、一瞬キョトンとした表情を見せたアリシアは、

「大したことではありません、それが私の仕事ですから」

そう言いつつも、少し恥ずかしそうにはにかむのだった。

第10話『情報整理とプラン決定!!』（後書き）

今回は本当に色々詰め込んだ回でした。

時間が無くて急いで書いたので、分かりづらい箇所があったかも？
もしそういう箇所がありましたら、感想の方で教えていただけると
嬉しいです、修正します。

そして今回はプロログ合わせると11話目ですが、表記で見れば
10話目の節目。

といっても、何か特別な変化があったりする訳でも無いのですが。

ということで、感想、評価などお待ちしております

第11話『腹が減ってはなんとやら』

「さてとそれじゃあ、早速冒険者ギルドに登録——しに行く前に、飯を食おう、飯。腹が減ってはなんとやらだ」

「なんとやらですね」

現在アルカディアの時刻はちょうどお昼時、全次元平和管理局本局での時刻も昼前だったため、お腹が空くのも無理は無い。

「食堂にレッツゴー」

「レッツゴー」

昼食を取ることに決めた貴京とアリシアは、何やらとてつもなく軽いノリで部屋を出る。

2人が向かった先、宿屋の1階に併設された食堂は、先程貴京と中年の元衛兵が小競合いを繰り広げたのが嘘の様な賑わいを見せていた。

お昼時だということを考えてもかなりの盛況ぶりである。

「あ、キキョウ様、アリシア様」

その中を誰ともぶつからず、さらには両手に料理の載ったプレートを持ってスイスイと移動していたセレナが、人混みの中から2人の姿を見つけて声を掛けてくる。

「良く見つけれられたなあ」

まさに大盛況な食堂、その中を何の苦もなく移動する姿、そして自分たちを発見する目の良さに、貴京が素直に驚きを表す。

「いえ、お2人は目立ちますから、あ、良い意味ですよ？」

——全身黒ずくめの長身の男に、煌めく様な金髪を腰まで伸ばした絶世の美女、これほど目立つ組み合わせも滅多に無いだろう。

「んー？そうか？」

「自分たちでは分かりかねますね」

2人して仲良く首を傾げる貴京とアリシアを見て、セレナはクスクスと笑いながら空いている席を示す。

「あの席が空いているので、あちらにどうぞ。それと、宿泊者の方は無料で料理が食べられるので是非ご利用ください、会計の時に宿泊されている部屋の鍵を見せてもらえれば結構です」

「ん、了解。というか、セレナは宿の主なのに給仕もやるんだな」

「小さな宿ですから、従業員は私含めて4人しかいないんです。でも、楽しいですよ？」

「ああ確かに、楽しそうだ」

2階から下りた直後の少しの間しか見ていないが、人でごった返す食堂の中、あっちへこっちへと忙しく動き回るセレナは、とても生き生きとして見えた。

「おーい、料理はまだかー？」

「あ、はい！！今持って行きます！！——すみません、仕事しないと」

「ああ、引きとめてすいませんでした。頑張ってください」

「はい、ありがとうございます！！お2人もゆっくりして行って下さい」

そう言うのと、すぐさま踵を返して給仕を再開するセレナ。

先程までと変わらず、スイスイと淀みないその動きは見事なものだ。

「本当に凄いなあ」

「才能がありますね——剣術の」

「だな」

何やら非常に飛躍した2人の会話に、偶然後ろを通りかかった男性が思わず足を止めたのだが、既にセレナに示された席へと足を進めていた2人が振り向くことは無かった——気付かないふりをしていただけかもしれないが。

——ちなみに

「うっわ何だこれ滅茶苦茶うめえ!!」

「この盛況ぶりも頷けますね」

料理は宿泊客以外の人が大勢食事しに来るのも頷けるおいしさだった。

「うめえええええええ!!」

「貴京様うるさいです」

第11話『腹が減ってはなんとやら』（後書き）

短いッ!!

話数が2桁になったし、キャラ設定でも載せようかと思う今日この頃。

感想の方で意見を貰えると嬉しいですが、載せてほしいという意見が多ければ、最新話まで読めばネタバレにならない程度のキャラ設定を載せます。

後世界観設定とかも載せるかも？

それでは、感想、評価など、お待ちしております

第12話 『比較的大きな冒険者ギルド』

「「ごちそうさまでした」」

貴京とアリシア、2人で一緒に手を合わせて礼をする。

少々多めに頼んでしまったかと最初は思っていた貴京だったが、想像以上の美味しさに容易く完食である。

「いやー、本当に美味しかったな」

「そうですね、期待以上でした」

2人が満足そうに、コップに残っていたお茶を飲んでいると、

「満足していただけたみたいですね」

そう言って、セレナが歩み寄ってきて食器を下げ始めた。

「ええ、本当に美味しかったです。ご馳走さまでした」

「ありがとうございます。料理長の腕は折り紙つきですからね」

自分のことのように誇らしげなセレナに、貴京は優しげな笑みを浮かべる。

「——っと、この後用事があるんです。ちょっと外出しますね」

「あ、分かりました。お2人が宿泊客なのは分かっていますので、会

計は結構ですよ」

「ありがとうございます、それでは行ってきます」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい、2人共、お気をつけて！」

こうしてセレナに見送られ、貴京とアリシアは一路冒険者ギルドへと向かった。



「さて、普通に出てきたわけだが、この街に冒険者ギルドってあるのか？」

キョトンとした顔でアリシアに聞く貴京、何も言っていないので普通にあるのだろうが、一応聞きたくなるのが人の心理である。

「ええ、フォルアスには比較的大きな冒険者ギルドがあるそうですよ」

「比較的大きな？」

「はい、フォルアスは観光都市として有名なので、要人や貴族の護衛任務がかなり豊富なようです。さらに、私達が最初に降り立った

『宵闇の森』がありましたよね？」

「ああ、あの狼がいた森か」

「はい。私達が降り立った場所は比較的街に近い場所でしたが、奥地に行けばかなり強力なモンスターや、希少な素材、薬草なども存在しているようです。それらの要因が合わさり、冒険者ギルドも街の大きさに見合わぬほどまで巨大化したようです。」

「成程、様々な依頼が豊富な地域ということか」

「そういうことです」

非常に分かりやすいアリシアの説明に、貴京がふむふむ頷く。

「しかし、それは好都合だな。これなら意外と速く目ぼしい人材を見つけられるかもしれない」

「そうですね」

冒険者ギルドは本来、冒険者となって生計を立てようとする人々が登録する組織だが、貴京とアリシアは全次元平和管理局に既に勤務している訳で、しっかり給与も貰っている（ちなみに月給制）。

貴京とアリシアが冒険者ギルドに登録する目的、それは生計を立てることではなく、実力ある冒険者を見つけ、仲間に加えることである。

そのため、大きな冒険者ギルドで有れば、実力のある冒険者も見つけやすくなると考えたのだ。

「貴京様、あれが冒険者ギルドの建物です」

「お？」

と、色々話している間に冒険者ギルドの建物に着いたようである。

外観は――宿屋などが近いだろうか。

大きな玄関に、掲げられた『冒険者ギルドフォルアス支部』の看板。宿屋と違う点は、武装した人々がひっきりなしに出たり入ったりしている点などである。

「ほうほう…さてと、それじゃあ行きますか」

「はい、行きましょう」

こうして、2人は全く緊張した様子などなく、悠々と冒険者ギルドへ足を踏み入れた。



「ほう、これは意外と…」

「綺麗ですね」

2人が冒険者ギルドへと足を踏み入れて最初に抱いた感想、それは『綺麗』というものであった。

勿論、床には土がついていたり、所々汚れが染み付いていたりするのだが、全体的に清涼な空気で満たされており、熱気や悪臭は全く無かった。

「ちょっと想像、というか経験からの予測とは違ったな」

実は貴京とアリシア、過去にも冒険者ギルド――に非常に似た組織に加入したことがあるのだ。

その時は別の星での任務で、今回と同じく任務上必要になったため加入したのだが、今回とは違い、建物内には酒場も併設されており熱気と悪臭が満ちていた。

職員はこんな中で良く一日仕事が出来るものだと、貴京とアリシアは2人で心底感心したものである。

その時とは違い、今回の建物は本当に冒険者の業務に関係する施設だけが集まっていた。

入口から入って目の前にあるのは役場の様に並んだ受付。恐らくそこで依頼の申請や完了報告をするのだろう。

左手にあるのは数組の丸テーブルと椅子。休憩スペースか：仲間でも募集するスペースだろうか？

そして右手にあるのは巨大な掲示板。所狭しと張られている紙を見

るに、恐らく依頼書が張ってあるのだろう。

右手の掲示板で依頼を選び、中央の受付で申請、複数人で取り組む依頼の場合は、左手のテーブルや椅子が置いてあるスペースで仲間募集——といったところだろうか。

貴京はそう予想をしつつ、中央の受付へと歩を進める。

「まずは、冒険者登録だよな？」

「その通りです。貴京様」

相変わらず完璧なサポートをしてくれるアリシアに笑みを見せながら、貴京は適当な受付の前に立った。

第12話『比較的大きな冒険者ギルド』（後書き）

昨日投稿できなかった…ということで日付が変わって20分後の投稿。

今回はちょっと終わり方が微妙かもしれない…

そしてキャラ設定は載せるべきなのかどうなのか、意見が欲しいです!!

ということで、感想、評価、ご意見などなど、お待ちしております!!

第13話『冒険者登録』

「こんにちは、ようこそ冒険者ギルドへ」

貴京が前に立つと、その受付を受け持っている女性職員が完璧な営業スマイルで頭を下げる。

職業上、貴京も営業スマイルは一応できるのだが、どうしても好きになれないのが本音である。

「こんにちは、あの、冒険者登録をしたいのですが」

「はい、初めてのお客様ですね」

女性職員はそう言うのと、カウンターの下から大量の書類を取りだした。

「うわ…」

局の仕事でも書類作成や整理を非常に苦手とする貴京があからさまに嫌そうな声を出す、書類作成や整理をそこまで苦手としない者でも顔を顰めそうな量である。

「ふふっ、手続きに必要なのはほんの数枚で、後は全部社会に出る上で当然のことや、冒険者としての心得などが書かれた注意書きなので、登録が終わってからゆっくり読んでもらえれば構いませんよ。というか読む必要さえ無い書類が大半です」

職員がそんなことを言っているのかと思うようなことを笑顔で言う

女性職員だが、貴京としては有難い言葉な上に、気さくそうな職員で何よりである。

「それなら良かった…あ、そうだ。連れも一緒に登録したいんですが」

と、自分だけでなくアリシアも冒険者登録をする必要があったのをお願い出し、一遍に登録を済ませられないかと女性職員に持ち掛けるみる。

「あ、それでしたらご一緒にどうぞ、ええと…書類はこちらです」

カウンターの下から再び出てくる大量の書類。

どうやら一緒に登録しても、書類は1人1組のようだ。

「それでは、登録方法のご説明をしたいと思います」

キリツと表情を引き締め、女性職員が書類を指差して説明を始める。

「まず、こちらに名前と、性別、年齢を。——はい、次はこちらに居住地を、定住してらっしゃらない場合は、現在拠点とされている場所をお書き下さい。尚、拠点を変更なさった場合はその土地に在ります冒険者ギルドで、拠点変更手続きを行ってください。——はい、次はこちらに得意とする武器などを——」

——そんな感じで女性職員に説明を受け、せっせと書類に記入すること約15分

「——はい、それでは最後に、こちらに拇印を——はい、これで冒険者登録に必要な書類は出来あがりました。お疲れ様です」

「うあー、疲れた…」

「貴京様、この程度疲れるなんて情けなさ過ぎます」

書類作成が大の苦手である貴京はかなり疲れた様子だが、ようやく冒険者登録に必要な書類の作成が完了した。

ちなみに、貴京に良く書類整理を丸投げされているアリシアは、全く疲れた様子は無い。

「それでは次に、冒険者について最低限知っておくべきことや、注意点などを説明させていただきます」

書類作成が終わると、次は冒険者についての説明が始まる。

「まず、後ほどお渡しします『冒険者証明書』は冒険者の身分証です。街の関所などでも身分証として使えますので、是非ご活用ください。尚、紛失、破損した場合は再発行が可能です。再発行には銀貨1枚が必要なので気を付けてください」

「成程、了解しました」

ちなみに——この世界、アルカディアの通貨は『銅貨』、『銀貨』、『金貨』、『白金貨』の全4種類で、一般的な家庭の平均年収が金貨1枚である。

「次に冒険者のランク、『冒険者ランク』についてです。最低ランクは『G』、そこから『F』、『E』といった感じに上がって行つて、『A』、『S』、『SS』、最高ランクが『SSS』です」

「ふむふむ」

この辺りはアリシアの説明通りである。

「登録したてなので、貴方達は当然Gランクからのスタートですが、Gランクの依頼は猫探しとか買い物の荷物持ちとかばかりなので、戦闘経験がある方ならすぐにDランク位までならいけるかと…というかいくことをお勧めします」

猫探しや買い物の荷物持ち…冒険者？

「えーと、今『Gランクの依頼』という言葉を使いましたが、依頼の方にも冒険者ランクと同じく、『依頼達成難易度』というランクが付いています。冒険者ランクと同じく、『G』が最下位、『SSS』が最高位です。自らの冒険者ランクより依頼達成難易度が下の依頼はいくらでも受けることが可能ですが、上は2ランク上までと規定されています。つまり、Dランクの冒険者なら、Bランクの依頼まで受けることが出来るわけですね」

「成程成程」

つまりGランクの自分達はEランクの依頼まで受けられるということかと、貴京はしっかり記憶に留める。

「では、最後にランクアップの方法について説明させていただきます。ランクアップの方法は大きく分けて二つ、まず一つ目『何かし

ら大きな功績を立てる』これは非常に稀で、たとえば滞在していた街が偶然強大な魔物に襲われ、それを討伐した場合などですね。もう一つ、こちらが一般的な方法なのですが、『条件を満たした上で昇格試験を受け合格する』この二つですね」

「成程、それで、その条件というのは？」

「はい、条件というのは、『依頼達成ポイント』の累計です。依頼達成ポイントというのは、依頼を達成することにより得られるポイントで、自らの冒険者ランクと同じ依頼達成難易度の依頼なら『1』、自らの冒険者ランクより1ランク上の依頼達成難易度の依頼なら『5』、そして2ランク上の依頼なら『10』のポイントが得られます。『Gランク』から『Fランク』へのランクアップだろうと、『SSランク』から『SSSランク』へのランクアップだろうと関係なく、ランクアップに必要な依頼達成ポイントは全ランク共通で『50ポイント』です」

「つまり、ランクアップの条件を満たすには、最低でも5回依頼を成功させなければならぬわけですか」

「そう言うことで御座います」

「ふーむ…」

今の貴京とアリシアの目標は、高ランク、それもできればSSSランクの冒険者を仲間に加え、共に魔王を討伐することだ。

仲間になって貰い、さらに相当な脅威である魔王を共に討伐しようというのだ、貴京とアリシア自身もそれ相応のランクを持たねば、相手にさえして貰えないだろう。

貴京が目標に設定している期限は半年、できる限り早くランクを上げたいが、先程女性職員が言った通り、大きな功績なんてそうそう立てられるものではない。

こればかりは、せめて2ランク上のクエストばかりを受けて地道に時間短縮しつつやるしかないかと、貴京は溜息を吐く。

「?――何か疑問がありましたか?」

「あ、いえ、気にしないで下さい。予想以上にランク上げに時間が掛かりそうだったので」

首を傾げる女性職員に、貴京は溜息を吐くのは露骨過ぎたかと慌てて取り繕おうとしたのだが、その時思わず思っていたことを正直に言ってしまう、取り繕えて無いじゃないか!!と自分で自分に突っ込んでみたりしていると――

「んー、冒険者登録したての貴方達には正直お勧めしませんけれど、どうしても速くランクを上げたいというのなら、ギルド主催の闘技大会に参加してみてはいかがですか?」

女性職員の口から出たのはそんな言葉。

「闘技大会?」

「はい、開催は1か月後、開催地は此処『フォルアス』。優勝賞品は――」

――『SSSランク』へのランクアップです」

「なんですと!?!」

――思わず本音を言ってしまったのは普通に正解だったかもしれない。

女性職員の話しに全力で食い付きながら、貴京はそんなことを思った。

第13話『冒険者登録』（後書き）

なんか一気に更新が遅れてしまっただけで申し訳ない。

次回はもう少し早く更新できたら良いな、と思いつつ、今回はこの辺りで。

それでは、感想、評価など、貰えると嬉しいです。

第14話『闘技大会参加申し込みと来訪者』

「マジですか！！本当ですか！！ガチですか！！」

普段は割とクールなキャラであるにもかかわらず、そのキャラをぶち壊してまで女性職員の話しにぐいぐい食い付く貴京。

「え、ええ、本当ですから、少し落ち着いて下さい」

常に営業スマイルを浮かべていた女性職員も、流石に苦笑いである。

「あ、すいません」

しかし、これは相当魅力的な話である。

それだけの賞品が出るのなら、アルカディアの強者もそれなりに出場するのだろうが、貴京は自他共に認める全次元最強クラスの強者である。

いかにこの世界で強者だろうと、貴京からしたら赤子同然。

赤子の手を捻るとはまさにこのことである！！

「あのー、説明してもよろしいでしょうか？」

「貴京様、落ち着いて下さい」

「む、申し訳ない」

色々暴走気味である。

「えーと、闘技大会とはその名の通り、『己の持ち得る戦闘技術の全てを駆使して相手と戦い、優勝を目指せ!』って大会です。ちなみにこれ公式キャッチコピーです」

非常に分かりやすいが何の捻りも無いキャッチコピーである、それで良いのか。

「参加資格は冒険者であることのただ一点。性別、年齢、戦闘方法は問いません。」

剣術で攻めてもよし、魔法で攻めてもよし、中には召喚士の方なんかもいますね。あ、召喚士については言わなくてもご存知ですか？」

「ああ、知ってます」

口ぶりからして結構希少な人材なのだろうか？と微かに首を傾げる貴京。

ちなみに、そんな貴京の知り合いの召喚士は、笑顔で神獣や幻獣を湯水のように召喚して来るとんでもない存在である。

過去に一度戦った時には、勝ちましたが相手のいる場所に辿りつくまでに1週間費やしたとかなんとか。

「開催はぴったり1カ月後ですので、もし参加されるのでしたら準備を整えておくことをお勧めいたします。参加申し込みは冒険者ギルドで可能ですか？」

「今します」

即答する貴京、流石の女性職員も苦笑いである。

「あの、本当に宜しいのですか？中にはSSランクの冒険者さんなんかも参加されます。並の技量では到底太刀打ちできないと思われ
ますが…」

至極尤もな女性の言葉、冒険者登録したての冒険者がSSランクの
冒険者を相手にして勝利するなど、通常ならまず思い付かない。

しかし、

「大丈夫です、俺、強いですから」

そう言って貴京は、不敵な笑顔を浮かべるのだった。



「それでは、またのお越しをお待ちしております」

「ありがとうございましたー」

「ありがとうございました」

深々と頭を下げる女性職員に、頭を下げ返して踵を返す貴京とアリ
シア。

あの後、闘技大会の参加申し込みを済ませ、冒険者に関する説明の残りを受け、冒険者証明証を受け取った2人は、今日の所は依頼を受けずに冒険者ギルドを後にした。

ちなみに準優勝の賞品は『SSランク』へのランクアップらしいので、アリシアと2人でワンツー狙いである。

冒険者に関する説明の残りは、チームを組んで依頼を受けた場合の話しやらなんやらだった。

「いやー、楽しみだな、闘技大会」

「相変わらず、貴京様そういった催しがお好きですね」

宿への帰り道を歩きながら、アリシアとのんびり会話する。

「殺し合いは好かんが、そういう力の競い合いは好きだな」

まだ何の力も持たない平凡な人間だった頃はそうでも無かったが――と、遠い昔をふと思い出す貴京。

「どうしたんですか？急に遠い目をして」

「いや、何でも無いさ」

「？変な貴京様」

「はっはっはっ」

そんな他愛もない会話をしつつ歩くこと数分。

「お、宿が見えてきた——ん？」

遠くに宿の入り口が見えた所で貴京が立ち止り、宿の入り口を凝視する。

「どうかしましたか？——あれは、衛兵？」

それを見て同じように宿の入り口を見たアリシアが、宿の入り口で何やらセレナと話している衛兵を見つけ首を傾げる。

「ああ、あの衛兵は確か——いや、間違いなくあの人たちだな」

「あの人たち？」

「ああ、俺が伸した中年男の、上司らしき人だ」

そう、宿の入り口で今まさにセレナとの会話を終え、頭を下げて踵を返した衛兵は、まさに昨日、またお札に來ると言って帰った衛兵だった。

「ちょっと急ぐぞ」

「畏まりました」

宿との距離は未だに100m以上あり、セレナと衛兵の姿を捉えられたのは貴京とアリシアの視力だからこそ。

此処まで来ているのに、このまま帰られるとなんとも言えない残念

な気持ちになるのは容易く予想できたので、呼び止めるため、貴京とアリシアは人の波を縫うようにして走りだした。

第14話『闘技大会参加申し込みと来訪者』（後書き）

更新遅れたのに短いとかどういふことなの…

次回は頑張れば…良いなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6839x/>

次元の平和を守ります!!

2011年11月5日22時10分発行